

小平市教育振興基本計画検討委員会第3回会議要録

- 開催日時 令和4年7月1日（金） 午前10時～11時50分
- 開催場所 福祉会館市民ホール
- 出席状況 （委員）出席12人
（市側）教育部長、教育指導担当部長、地域学習担当部長、教育総務課長、
地域学習支援課長、学務課長、教育施策推進担当課長、
中央公民館長、中央図書館長
- 傍聴者 なし

○会議の概要

1 開会

委員長より開会が宣言された。
新たに委員になった方の自己紹介と事務局の紹介を行った。

2 議題

（仮称）第二次小平市教育振興基本計画骨子（案）について
事務局より資料2、資料3に基づき説明を行った。

[質疑応答・意見交換]

委員長：まず、資料2の「目指す人間像」「教育理念および計画の目標」について、ご質問、ご意見をお願いします。

委員：計画の基本理念としての意見を集約しているということで、各委員のご意見が反映されていると思う。前回もICTに関してご質問させていただいた。「新たな時代の教育」の部分で、計画の基本理念「学び・体験を通じてお互いに認め合い、励まし合い、共に生きるまち小平」ということは理解できるが、この集約されたものの中に、「新たな時代の教育」が感じられないと思う。これを基本にして、今後、具体化される中で反映されていくのかもしれないが、どのようなお考えなのか、お聞かせいただきたい。

事務局：「目指す人間像」や基本理念、目標について、もう少し詳細に説明させていただきたい。

「目指す人間像」は普遍的なものとして捉え、大きく変えることはない。「自立、共生、貢献」の三本柱も、同様であり、座りがよいので修正しない。これらを受けて、委員の皆さまのご意見を踏まえた上で、基本理念をつくり上げた。キャッチフレーズ的にわかりやすく、全体を捉えた表現ということで、現行計画の基本理念「はぐくみ・支え合い学びでつながる小平のひと・まち・みらい」を少し押し進め、「学び」に加え、「体験」で視野を広げつつ、重要な要素として「自分のよさ、可能性を見つける」ということを加味した。自己肯定感、あるいは「他者を価値ある存在として認めること」「協働」や個

別最適化、ニーズの多様性、柔軟性等を大事な要素として盛り込んでいこうと考えている。その中で、一人一人の子どものよさを引き出すための個別最適化の1つの手法として、ICTの活用は非常に大事だと捉えている。

表現としては、下段の計画の目標の中で、「子どものよさを引き出す」という表現がある。これを具現化する中で、1つの手法として、しっかりと押さえていきたいと考えている。

基本的施策の中で、さまざまなICTを活用した学習活動や教員の資質向上等、掘り下げていく必要があると考えている。

委員：ICTは目標ではなく、あくまでも目標達成のための手段であるので、理念に全面的に出てくるのではなく、しっかりと意味を捉えてお考えいただけているとわかった。

委員長：今の委員のご意見は、次の基本的施策に大きく関わる部分である。関連して、教育的施策についてのご意見、ご質問に広げて承る。

委員：2点質問する。

委員の意見の中ほどに「個別最適化を行うにあたっては、両輪として協働的な学びが必要」という記述があるが、何が「両輪」なのかお聞きしたい。

また、「一人一人の子どもたちの良さや可能性を最大限に引き出すためには教員の多忙感があってはならない」という記述があるが、「多忙感があってはならない」という部分は、骨子案5に反映されているのか。

事務局：1つ目のご質問の「両輪」とは、文部科学省が新学習指導要領で示した文言であり、「個別最適化な学び」と「協働的な学び」が今後、教育を進めるにあたっては非常に重要であるということであり、これが両輪だと理解している。

2つ目のご質問の「教員の多忙感」については、従前から課題になっていることであり、現行計画の振り返りから見ると、6「教育の資質向上」では、例えば「教職員のメンタルヘルスの保持増進」等、さまざまな課題として浮かび上がっている。施策化する際に、複数の事業や考え方をもち、この課題を解消していくと考えるが、新しい計画の体系骨子案の中では、6「教育の資質向上」と7「学校の経営力の向上」に入ってくると考えられる。

6では、一人ひとりの資質を上げるために、例えば研修を進めてICT機器のスキルを上げる、勤務時間の適正化、働き方改革の推進を個別指導の中で上げていく等が考えられる。

7「学校の経営力向上」では、教育委員会として、経営改善をさまざまな形で進めるべきだということで、例えば、公務員としての使命感の高揚やメンタルヘルスの保持増進がある。また、地域と一体となり地域の教育力を上げていく等のイメージがあるので、

「コミュニティ・スクール」と「地域学校協働活動の一体的推進」という表現を例示している。地域全体で、「学校、家庭と地域がつながる」という表現が、目標の中にもあったが、さまざまな手法で課題を解消し、最終的に教育の向上をめざすというイメージである。

委員長：学習指導要領は10年間隔で変わり、教育のあり方が示されるが、そこに出てくるキーワードとして「協働的、対話的学び」という集団の学びと、「一人ひとりのよさや可能性をのばす」という個別最適な学びの2つを両輪として捉えているというご説明であった。

委員：教育計画の基本理念に、「学び・体験を通じて」とあるが、「体験」という言葉は基本的施策に入っていないことが気になる。教育の分野で「体験」という言葉は、ただ単に経験することではなく、何かしらの教育的意図があって子どもに経験させるときに使うと認識している。基本的施策からは、そのような意図も見えないように感じる。おそらく、地域での活動や学校での子ども同士の関わりも含めているとは思いますが、それを施策にもう少し踏み込んだ意図として入れ込めるとよいと思う。現時点で、「学び体験を通じて」という部分が、基本的施策のどこに反映されているのかも含め、教えていただきたい。

事務局：資料2の計画の基本理念の「学び・体験」という言葉だが、「学び」に関しては学校教育では学習指導要領に基づいた学習があり、それ以外にも、生涯学習等さまざまな学習の場がある。さらに、「学習」という体系づけられた領域以外に、図書館や子どもの居場所等、地域での様々な場での体験を通じて幅広く学ぶことも入ると思う。いろいろな場所で、いろいろな機会を通じ、「相互に学び合う、認め合う、励まし合う」というフレーズにつながると考えている。具体的にどの施策だけを指すということではなく、①では幅広く学習の中にも入っていると考えられるし、②③の学校・家庭・教育がつながり三者一体で進める地域での教育環境においては、8家庭教育、9地域の教育力、11多様な学び、12生涯学習等も幅広く網羅する表現として考えている。

委員：確かに大変幅広い言葉なので、そのような意味合いで入れていることは、よく理解できた。ただ、「それを体験させるのか」、「地域、家庭、学校が連携することにどのような教育的意図があるのか」を示すことができれば、より一層深みが出ると思う。

委員：「学び体験」に関して補足する。資料3①3段目の「豊かなこころの育成」の3つ目「高齢者や障がい者との交流」に、共生社会という点も挙げられると思う。また、ボランティア活動で赤い羽根共同募金等、地域の方と一緒に活動することも体験の1つだと思う。④「自立心の養成」の1つ目「キャリア教育」でも、進路指導ではなく職場観をつけるということで、職場体験等も具体例の1つだと思う。

委員長：基本理念は、基本施策の上位にある教育目標、さらにその上位にある理念に関わることなので、この計画を推進するためには、具体的な施策例の中に、この体験的活動が随所に出てこなければいけないというご意見だと理解した。

委員：基本的施策をみると、現行の施策よりコンパクトにわかりやすくまとめられていてよいと感じた。それだけに、基本的施策の1つ1つの項目をみれば、おおよそ内容がわかるようなつくりになっていないといけないと思う。

9「地域の教育力の育成」については、それだけをみると何なのか疑問に感じる。現行計画やアンケート結果等からみる課題で、9の連携協働体制の維持充実が必要であるというご意見がある中で、地域との連携はこれまでも、これからも大切なテーマだと思うが、その中で「地域の教育力の育成」とは少し違うのではないかと、違和感を覚える。9を「地域との連携協働」としたほうが、わかりやすいと思う。「地域の教育力の育成」は、施策の例をみれば理解できる面もあるが、これらをまとめてそのように表現されている意図を教えてください。

事務局：現行計画では、「9 地域教育の充実」という表現になっている。「連携共同体制の維持充実、地域人材の発掘育成」という具体的な課題を踏まえた上で、9と5の一部、14の一部を統合した。施策として挙げるものについては、担当課と話し合いながら決めることになると思うが、表現の意図としては、教育の充実から一歩進み、計画の目標にあるように、「学校・家庭・地域がつながる」ということで、三者が一体となり持続可能な新たな教育環境をつくり上げていくということである。現行の計画の目標では「学校・家庭・地域が互いを育て合い、子どもを支えます」となっている。これをさらに進め、「教育環境を共につくり上げる」という主旨の表現に改めている。ご指摘の通り、施策の例がそぐわない部分もあるかもしれないが、基本的には既存計画の中のさまざまなリソースを統合し、教育力を高め、教育環境をつくり上げるという意図を込めている。考え方に則した施策であるので、内容的な部分は、今後、改めて事務局と主管課で検討して整理したいと考えている。

委員：今のような多くの説明がないと9は成立しないと思う。他の表題は見れば、その後の施策例がいくつあっても納得できるつくりだと思える。

「地域の教育力の育成」という表現だと、「低いところから高める」という上から目線のニュアンスがあるように感じる。「何かをしてもらう」というように求めるものが多く、「子どものために一緒に取り組む」という観点が見えない。また、地域それぞれのよさがある中で、それを単に「地域の教育力の育成」という言葉にまとめてしまうことにも違和感を覚える。「地域との連携協働」の中に、教育力を高めるための施策や取り組み等を例として示したほうが、わかりやすいと感じるが、いかがか。

コロナ禍ではしかたがない面もあるが、「今後、どのようにしていきたいのか」を考え

ると、地域の一員として、この9の表題は承服しかねる。できれば再考願いたい。

事務局：地域で活動されている方の視点でのご意見をいただき、感謝する。内容をわかりやすくする必要もあると思うので、検討させていただきたい。

委員長：他市と比べた、小平市のよさということで、「地域と学校との連携協働」というキーワードを大切にさせていただきたいと思う。9の表題から、それが感じられないというご意見であり、確かにそのように思う。ご検討をよろしく願いたい。

委員：新しい計画の基本的施策8「家庭教育への支援」についても、「学校家庭地域がつながり、持続可能な教育環境をつくります」ということは、学校があり、家庭があり、地域があり、それぞれがよさを発揮して連携するということである。それに合わせて、7「学校の経営力の向上」で、学校も努力するということだと思う。8「家庭教育への支援」では、家庭の力を引き出すというよりも、上から教えるというニュアンスになると思う。家庭教育への支援は必要だと思うが、教育の目標②に必要なのか。

家庭の教育力を高めていただくことを期待し「支援」とするのであれば、③「一生涯にわたって学び受け継がれる小平の教育の好循環をつくる」というところに入れてもよいと思う。家庭への支援を直接行っている例で言えば、公民館の講座や図書館での幼い子どもへの読み聞かせ等が考えられる。幼いころから一生涯にわたって学び続ける環境、つまりは社会教育を行っていく環境を提供している現状を考えると、③に入るのではないかと思う。学校が家庭に関わらないという意味ではないが、学校が家庭に入って直接的に何かを指導するということは、あまりないと思うので、違和感を覚える。誰が、どのように施策を展開していくのが、見えにくいと感じる。

事務局：現行計画の8「家庭教育への支援」は、地域による家庭教育への支援が、取り組み内容として記載されている。家庭教育の向上を図っていこうという、家庭へのアプローチだが、その中には図書館事業のブックスタート等も挙げてある。

新しい計画の中でも、アプローチのしかたで、図書館や公民館から家庭への働きかけが出てくると思われる。ご指摘を踏まえて、③にも再掲として挙げるようにする。複数のところに事業が挙がることもあり得ると考えている。

委員長：「連携・協働」というキーワードの中で、これを捉えるとわかりやすいと思う。

委員：2点質問する。

1点目。②「学校・家庭・地域がつながり持続可能な教育環境をつくります」の10に、教育環境整備の例の中に、「ICT環境の整備・充実」があるが、これは家庭と学校を結ぶオンライン授業等を見据えて、ここに入っているという解釈でよろしいか。

2点目。13「生涯スポーツの推進」の「ユニバーサルスポーツの推進」があるが、他の事業と比べて、この言葉のフォントが大きいのは、力を入れている部分なのか。また、ユニバーサルスポーツとは具体的にどのようなスポーツなのか。参考資料を読んでもわからなかったなので、教えていただきたい。

事務局：1点目の「ICT環境の整備・充実」について、現在、児童・生徒は1人1台のパソコンを活用している。今後、児童・生徒が自宅でオンライン授業を受けることになるかもしれないが、今の時点で計画の中に明確に見据えることは考えていない。

学校内のネットワーク環境については、まだ少しつながりにくいというご指摘も受けているので、今後はネットワークの整備・充実が中心になると思われる。また、現在、学校内でパソコン画面をテレビに映して共有しているが、これについても技術の進化も含め、今後どのようにしていくのか、考える必要があると思っている。

事務局：2点目の「ユニバーサルスポーツの推進」について、ユニバーサルスポーツの具体例としては、小平市内では「ボッチャ」が盛んになっている。サークルが市内小学校への出前授業を行っている。比較的容易に参加できるスポーツの取り組みを進めている。

事務局：補足する。文化・スポーツの事業については市長部局に移管されている。ボッチャ等のユニバーサルスポーツの事業的な展開、振興については、この教育振興基本計画とは別に、今年度、文化スポーツの基本方針として市長部局でとりまとめる動きがある。この教育の計画の中では、それらを捉え、どのように学びにつなげていくかという視点で記載するので、若干重なる部分がある。

事務局：1点目の「ICT環境の整備・充実」について補足する。学校についてのみを説明したが、10の左側の2番目に「学校、家庭、地域」とあるように、ICT環境は学校に限らず、公民館や図書館等の社会教育の場でも整えていく必要があると考えている。

委員長：「ユニバーサルスポーツの推進」に関しては、「スケートボードの練習場がほしい」というようなご意見もあった。この「ユニバーサルスポーツの推進」は、アンケート結果からでた一意見と捉えていく必要があると思う。

委員：ICT機器の活用についてお聞きする。3「豊かなこころの育成」に関して、不登校児童の対応にICTを活用して、オンラインでも授業が受けられる環境になればよいと常々考えている。学校でのICT環境の整備・充実は順次進めていくという話だったが、自宅でのオンライン受講の整備については、何か進めておられるか。

事務局：今年度より1人1台の学習用端末を自宅に持ち帰ることができるようになった。端末

の活用のしかたについては、できるところから始めている。最終的には、どのような状況の子どもに対しても学習の場を保障するということが非常に大切であり、その手立てとして家庭で端末を使って学習することは有効だと考えている。実現できるように準備していく。

委員：2点質問する。

1点目。新しい計画の6「教員の資質向上」の③「勤務時間適正化」とあるが、教員の適正勤務時間とはどのぐらいなのか。ご回答しにくければ結構である。

2点目。ICTのキーワードが4つ挙がっているが10年後の時代がどのようになっているのか想像しにくい。小平市教育委員会で昨年度より児童生徒全員にタブレットが配布されたということだが、次の世代では自分たちで購入するようになるのかもしれない。情報モラルやSNS利用等をどこかに入れて、ICT機器の使い方を家庭にも啓発していかないと、大きなトラブルにつながる可能性もあると思う。

事務局：情報モラルについては、アンケート結果の課題でも、5「共生と地域社会貢献意識の醸成」で、「情報モラル教育」という言葉が挙がっているが、今の段階では施策の例に言葉としてはピックアップしていない。ご指摘の通り、重要な要素なので、施策の中に盛り込めるか、検討していきたい。

委員長：SNSに関しては、実際は家庭の中で行われているものであり、どこに位置付けるのかと考えると、「持続可能な教育環境」「家庭への支援」「連携・協働」というキーワードと、SNSが関係するのではないかと思う。

委員：資料2「計画の目標」の最下段、2「持続可能な教育環境をつくっていくこと」、3「小平市の教育の好循環をつくっていくこと」が重要だと考えている。

資料3に関して、現状では若手の教員は業務量が多く、大変苦しんでいるが、志は高いと感じる。教育現場では、新型コロナウイルス感染症対策で、人と関わる活動が制限されたことも影響し、子どもたちのコミュニケーション能力が下がり、トラブルが多くなっている。解決に時間のかかることもある。保護者も子育てに困っていて、相談件数も増えている。その結果、児童対応と保護者対応で手いっぱいになり、授業準備や丸つけを夜遅くにしたり、休日に出勤して対応する状況が続いている。そこの問題を何とか解決しなければ教員をめざす者が減り、最終的には小平市の教育の質が落ちるのではないかと心配している。

解決策としては、資料3「具体的な基本施策」の6、7が当たると思う。専門家に協力をしていただくということで、具体的には、医療や児童相談所との連携、教育相談、スクールロイヤー等の活用である。特に押し進める必要があると思うものはスクールロイヤーである。学校の対応では難しい場合は、スクールロイヤーに対応していただき、

その分、教師には学校での教育に集中してもらいたい。

7「多様な主体との連携と施設のあり方の検討」とあるが、「多様な主体」というよりも、専門機関との連携と施設のあり方は別のものなので、切り離し、強調した方がよいと思う。

保護者からの質問や要求が増えていると感じるが、それは保護者が悪いのではなく、子育てに迷う中、相談できる場所が少ないということに原因があると思う。相談しているつもりでも、苦情になっている場合には、保護者自身も苦しんでいることが多いと思う。8、9に「子育てに悩んでいる人をどのように支えていくのか」「就園前の子どもから集える場所をつくり、人間関係を築き、相談場所をつくる」ということを入れ、市が意図的に行い、若い世代に「小平市では子育てしやすい」とPRできれば、志のある方が小平市に集まり、苦情が相談になり、学校に力を貸そうと思う人が増えてくると思う。

好循環に関しては、現在、活躍されている方が高齢化していくので、若手世代の方にも地域活動に参加していただくことが重要だと思う。

先日、板橋区のボローニャ絵本館に行ったが、そこでは絵本館を中心に、赤ちゃんから年配の方がまで様々な世代の人が集まっていた。そのような場所が小平にもっと増えるとよいと思う。鈴木遺跡内の新たな公園開発にも、その可能性を感じる。

委員長：具体的施策の例の1つとして、ご紹介いただいたが、その中で「専門性を有する関係諸機関との連携」に関しては、事務局、どのように捉えればよろしいか。

事務局：7「学校の経営力の向上」に「多様な主体との連携」という記載があるが、確かに専門機関というよりも、学校を地域拠点として、そこに入り込んでいただける地域の活動団体等をイメージしている。ご指摘のような「それぞれの分野の専門家」という視点は、今のところあまりない。「教員を今後さらに下支えして、能力を高める」ということで、さまざまなアプローチがあると思うが、6、7の中にそのような視点を盛り込んでいけるように、検討する。

委員：若い世代をどのように支えていくか、子育て等の困りごとにどのように手が貸せるのか考え、「小平に住んでみたい」と思ってもらえるような施策がもっと増えるとよいと思う。

事務局：子育て相談について、家庭教育への支援について、公民館では子育て支援講座を実施している。生まれてすぐの方を対象に、子育ての悩みや孤独の解消、子育てに関わる学習等を行なうことにより、一緒に受講した方々でサークルをつくり、講座修了後も互いの悩みを相談し合える機会がつけられている。大変好評で、多くの方にご参加いただいている。

公民館では、毎週、未就学児から小学生の方を対象にした居場所をつくっており、そ

ここに高齢のボランティアの方は関わり、学習支援や折り紙等の指導をしていただいている。

現在、公共施設マネジメントの中で、小学校に公民館を複合していくという計画が進められている。この計画が進むと、小学校の中に、新しい子どもの居場所、地域の皆さんもかかわることができる居場所がつくられることになる。ここの例示には具体的に出し切れていないが、そのような連携がされることで、いろいろなことが進んでいくと思う。

まだ試験的な取り組みではあるが、公民館では現在、高校生の方に関わっていただいている。若い世代の方にも、地域の方と関わる事が実現できるようになると期待している。まだ計画として出せるような状況ではないが、少しずつそのような取り組みを進めたいと考えている。

事務局：この計画をつくるにあたり、庁内検討委員会の中では、子育て支援課や保育課にも議論に参加してもらっている。当該部署には、子ども・子育て支援計画があり、家庭支援、子育て支援の大きな事業展開はそちらを基に進められている。重なる部分や社会教育の延長線上でのアプローチもあると思うが、ここに記載されているものは、あくまでも案である。施策の展開は、今後、検討していくことになる。

委員：子育て支援や未就学児への支援について、地域の方がイメージできるよう記載していただけるとよい。

委員長：具体的な施策例に関するご意見であるが、今後、これらの検討を進めるということである。このご意見は、基本的な施策8に当たるのか、12に当たるのかを整理して、施策例をご提示いただけるとよいと思う。

委員：3点質問する。

1点目。小平市がめざす人間像は「自立・共生・貢献」ということだが、10年後に小平市の子どもたちが、そのような子どもになったのか、どのようにしてみることができなのか。めざす人間像を書くことはたやすいが、どのように測るのか。

2点目。基本的施策8「学校・家庭・地域の連携と事業の推進」だが、私も過去にPTAの会長を2年間務め、「学校・家庭・地域が三位一体となって取り組みましょう」というスローガンを掲げていたが、市としては実際にどのようにしたらつながることができるとお考えなのか。学校であれば学習がメインになるし、家庭であれば生活、地域では行事や伝統というものが中心になるが、それらを子どもたちに伝えることで、めざす人間像につながるのだと思う。市でお考えの具体例があればお示しいただけるとわかりやすいと思う。

3点目。ご提示いただいた骨子案は大変よいと思うが、小平市は広いので、地域差が

ある。地域差を埋めるためにどのようなことをしていくのか。教育にも差が出ていると思うので、そのようなことに関してお考えがあればお聞かせいただきたい。

事務局：1点目の成果を捉える方法であるが、現行計画においては教育の目標をいくつか挙げ、その要素をアンケート調査の中で、「自立・共生・貢献」に紐づけられる形で、授業の理解度を聞く設問や、「自分を大切に思うかどうか」という設問を設け、児童や生徒、一般の方の意識の変化を数値化して捉えてきた。新たな計画でも、同様にその変化を踏まえて10年の計画進行の中で改定を行なう局面があれば、状況を反映させながら、計画の変更、施策への展開に結び付けていきたいと考えている。

2点目の「学校・家庭・地域の連携と事業の推進」の具体的手法については、大変難しい課題である。計画の中にさまざまな事業が展開されているが、地域のリソースとつながりながら、生かしながら進めるという考え方を共有し、それぞれの事業展開を進めていくことになる。計画の中では、まず、考え方がどうあるべきか、理想図はどのようなものを整理し、見える形にして、それぞれの部署がそれを意識して事業展開を進められるようにしていきたいと考えている。

事務局：3点目の地域差に関しては、小平市教育委員会の考え方としては、市内全域を一律にしたいということよりも、地域ごとの特性を生かし、地域の中での取り組みを尊重するということである。ただ、PTAなどの集りで、各地域での取り組みの様子を共有しながら進めていけるように、場の提供を積極的にしていきたいと考えている。それぞれの地域が、さらによくなるような形で動いていけるとよいと思う。

委員：地域ごとで取り組みを進めていくということだが、保護者同士で話し合ったときに、地域の方と密接につながり、活発な活動ができていく地域もあれば、そうでない地域もある。活発でない地域では、「ボランティア等の負担も少なく、自分の仕事に集中できる」という意見も聞く。同じ市内であっても地域によって差があるということに、大きな違和感を覚える。市の方針として、基本的なものだけ定めて、「詳細は地域で決めてほしい」ということではよろしくないのではないかと。

事務局：統括コーディネーターを3名配置している。現在は地域に入っていないが、今後は経験を生かしていただき、地域にも積極的に関わられるようにしていきたいと考えている。

委員：2点目の質問に関して、地域ごとのリソースをはかっていくということだが、現行の計画にも9「地域教育の充実」に「連携協働体制の維持・充実」があるが、内容的には新しい計画と同様だと思う。今まで計画されていたものを、次の計画でも挙げ、今後はリソースをはかるということだと、「これまでの10年は何をしていたのか」ということになると思う。目標に掲げていたけれども、実際には実行できていなかったと推測され

るが、いかがか。

事務局：表現が足らず申し訳ない。現行計画にも計画策定時点での理想像が表現されており、それを広げる形で施策が挙げられていると思う。その後、現行計画が進む中で、例えば、地域のコミュニティ・スクールというものができあがり、地域の方々が学校の経営に参画される形になり、感謝している。ゼロからリソースを探すのではなく、そのような新しい要素が出てきたことも踏まえながら、新たな計画に加味していける部分があると思う。そのように既存のものに新しいものを重ねていければよいと考えている。

事務局：以前は、地域の皆さんに学校支援をしていただくという一方向の時代であったが、その後、学校も地域に向けて発信し、また地域の皆さんも地域に関わるという時代が変わってきた。コミュニティ・スクールは、地域とともにある学校づくりをめざそうというコンセプトであるので、地域学校協働活動は学校を核とした地域づくりをめざしており、双方向の取り組みとするということで、国も課題を整理してきた。どのようにして地域とつながるか、地域学校協働活動の中で、PTA や校庭を使っているスポーツ団体、民生委員、図書館や公民館等の社会教育施設、福祉施設等、いろいろな方々と緩やかなネットワークをつくり、少しずつ学校とともに地域をつくっていこうという考え方に整理されてきた。そのような方向に、教育委員会全体がネットワーク構築のためにどのような取り組みをするのかが、1つの課題だと認識している。社会教育が中心となり、そのようなネットワークを構築していくことになる。

地域差は、それぞれの学校の個性として受け止めればよいと思うが、関わり方については、そのようなネットワークをどの学校でもつくれるようにすることが重要だと考えている。

委員：12「生涯学習を通じた地域づくりの推進」で、地域の伝統文化の承継・推進について申し上げる。私は自治会の役員もしているが、5年ほど前から「糧うどん」の講習をしている。私は小平市の出身ではないが、青少年委員を務めて、糧うどんの存在を知り、次世代につなげていくべきものだとということで、自治会で取り組むようになった。「小学校でも糧うどんの講習があったが、なくなった」という話も聞いた。学校では多くの教育カリキュラムがあり、講習会まで手が回らないという事情があると思うが、その部分を地域で担うということだと思う。その際に、公民館で役所主導で行うこともよいと思うが、自治会等、地域にすでにある団体で取り組めるとよいと思う。地域による温度差はあると思うが、すでに活動している団体を活用した方法も盛り込んでいくとよいと思う。

地域の伝統・文化ということでは、熊野宮でもポスターをつくり、神輿等の情報を伝えている。祭の前日に子どもたちの宵宮を行い、子ども神輿やゲームやボッチャ等もしている。地域によっては熊野宮から離れているところもあるので、そのような情報を小

学校に流すことで、地元の祭の存在を知り、出向いてくれると思う。地域の伝統を次の世代につなげていく1つの流れになると思う。祭に関しては宗教的な要素もあるので、難しい問題もあるかもしれないが、事務局のお考えがあればお聞かせいただきたい。

委員長：具体的施策の例に関わるご質問であるが、事務局、いかがか。

事務局：小学校の児童等が地域の活動に参加する、地域の伝統文化に触れ学ぶという形は、いろいろ考えられると思う。今後、施策の展開の中で検討できるか、ご意見をとって承る。

委員：「市の伝統文化の継承」が「生涯学習を通じた地域づくりの後継者の育成」の部分に入っている。公民館事業の内容は何であるのか。

また、子育て支援を行っているということだが、参加する人が限られているのではないか。全員に情報を伝えるとなると、やはり学校にいる子どもにアプローチしたほうが、広く伝えることができると思う。公民館事業を、公民館の方が、学校に出向き行なうことや、自治会の方が、学校に出向き、糧うどんの講習会をするというようなことができれば、一極化せずに、子どもたちに広く広めていけると思う。

委員長：施策推進の具体的な方法についてのご意見をいただいた。

事務局：1つの例として、子育て支援の話を挙げていただいたのだと思う。目標を達成するにあたり、家庭に向けて情報等を伝える手段は複数あるとよいと思う。学校を通じる方法、公民館で展開される事業の情報を伝える方法等、いろいろな方法を使うことで、目標が達成しやすくなると考える。それぞれの事業の中で一番よいやりかたを見極めて進めていくということになる。

事務局：「学校を中心に」ということで、学校の存在の大きさを改めて感じた。地域と連携協力した教育活動は、学校によって、総合的な学習の時間や生活科の時間を中心に行っているが、学校側も地域にどのような教育資源があるのかを把握し、使えるものは使い、子どもたちが地域を知る学びを展開していくことは、今後、大変重要な視点になってくると思う。そのような視点で、教育過程を形成していけるとよいと考えている。

委員長：私から1点、意見を申し上げる。今回の基本施策の中で、ICT機器の活用についてのご意見がいくつかあった。今回の基本計画の中で、「ICT機器」という文言は、学習活動の中に限定的に使われているような印象を受ける。

先々週、五中地区の教育懇談会に出席したが、ほぼ関係機関全員の出席があった。会議は対面会議も併用したハイブリット型のオンライン会議であった。また、私どもの高校でも保護者会は6年間の一貫教育校のため、通常、保護者野出席率は2割もないが、

ハイブリッド型の会議にしたところ、出席率は9割になった。このように、ICT機器の活用を授業だけに限定的に捉えることでよいか疑問を感じる。GIGAスクール構想により、子どもたちは1人1台の端末をもっている。高校では保護者負担で購入している学校も多い。10年先の教育現場で、ICT機器がどのように広まるかは、無限の可能性があると思う。この教育基本計画は10年先を見通して策定するのだが、例えば②「学校地域家庭、持続可能な教育環境」はICTが重要な役割を果たすのではないかと予想される。もちろん、公民館事業の中では、対面で行うよさはある、人と人との触れ合いは大事であるが、高齢者で外出できなければ、スマートフォンを使い、オンラインで参加することも可能である。ICT機器の活用は、より広く多面的に捉える必要があると思う。

他にご意見等がなければ、質疑、意見交換は終了する。

事務局：本日は貴重なご意見をいただき、感謝する。

今後は、いただいたご意見を踏まえ、目標を実現するための具体的な方策となる、施策の具体的な検討を行い、計画素案を作成する。次回の会議では、この素案をお示しし、皆さまからご意見をいただきたいと思いますと考えている。

3 その他

次回会議は、令和4年10月4日午前10時開催予定とする。